

活動報告

こころのクリニック 2022 年度から 2024 年度までの 受診状況と今後の課題

大谷 正人^{1, 2)}, 平山 木綿子²⁾, 半野 杏果²⁾,
近藤 年隆^{1, 2)}, 水谷 史生²⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 医療福祉学科

2) 鈴鹿医療科学大学附属 こころのクリニック

キーワード： 大学附属クリニック, 児童青年精神医学, DSM-5, 神経発達障害

要 旨

2022 年度から 2024 年度までの、こころのクリニック受診者の現状とその課題について報告した。2022 年度からの延べ受診者数については、2022 年度が 4,738 人、2023 年度が 4,959 人、2024 年度が 5,107 人と増え続けている。初診患者は 3 年間で計 643 人であった。そのうち、幼児・小学生・中学生・高校生の年代の子どもが 58.2%を占めた。疾患別にみると、神経発達障害群が 54.1%と多くを占めて、特に注意欠如・多動症と自閉スペクトラム症だけで 45.2%になった。他には抑うつ障害群が 17.2%、不安障害群が 8.7%などの順に多かった。2025 年度から診療する医師が 3 人となり、開院日も週 4 日から 5 日となり、1 週間の診察時間も 20.5 時間から 26 時間に増えたが、毎月約 60 人の初診依頼を断って、翌月以降の再度の電話連絡を依頼せざるを得ない状況が 2025 年度になっても続いていることを考えると、児童・思春期を中心とした診療体制の更なる充実が望まれる。

1. はじめに

—こころのクリニック 2022 年度から 2024 年度までの診療の概要など—

鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニックは 2017 年 5 月に開院し、2025 年 6 月の時点で 8 年余りが経過した。開院後 5 年間の状況は、鈴鹿医療科学大学紀要第 26 号¹⁾、第 29 号²⁾などで報告したが、今回はこころのクリニックにおける 2022 年度から 2024 年度までの 3 年間の受診状況を中心に検討しながら、こころのクリニックの現状とその課題について記したい。

こころのクリニックでは、2022 年度から 2024 年度まで医師が 2 人、公認心理師（臨床心理士）が 2022 年度は 1 人、2023 年度からは 2 人の体制で診療を行っている。心理師は 2 人とも非常勤で、心理検査及びそのフィードバックを担当しており、心理療法はしていない。また事務員は 2022 年度からはほぼ 5 人で、患者や家族への対応、医療事務、関係諸機関との連絡など、多岐にわたる業務を行ってきた。なお、1 人は心理検査業務と医療事務を兼務している。事務員の勤務体制は個々によって様々であり、事務室に 3、4 人在室していることが一般的である。2022 年度から 2024 年度は週 4 日の開院で、月曜日は 14:00～17:30 の 3.5 時間、火曜日は 9:00～13:00 の 4 時間、木曜日は 9:00～13:00 及び 14:00～17:00 の 7 時間、金曜日は 9:00～12:00 及び 14:00～17:00 の 6 時間の診察であった。

なお以下の報告については、通常の診療で得られた集計データを用いており、特定の研究目的で個別のインフォームド・コンセントを取得したものではない。

2. 受診者数などの 3 年間の推移

最近 3 年間の受診者数の推移を表 1 に記した。延べ受診者数は、開院年度である 2017 年度は 1,103 人であったが、2022 年度は 4,738 人、2023 年度は 4,959 人、2024 年度は 5,107 人と毎年増え続けている。また年間の初診者数は 2022 年度 335 人、2023 年度は 166 人、2024 年度は 142 人となっている。2021 年度は 145 人

あったので²⁾、2022 年度に突出して多くなったが、この背景としては筆頭筆者が兼務していた四日市市のクリニックを 2022 年 3 月に退職したことに伴い、そのクリニックの受診者が当院に転院となったことが大きな要因と考えられた。

初診の受付について、依頼があった時点で順次受け付けるという形にしてきたが、初診前の待ち期間が半年を超えて、受診者の実情にそぐわないため、2020 年 12 月から、月の初めの診察日に 3 か月後の初診を電話で受け付けるという形に変更した。それでも受付開始後すぐに初診枠がうまってしまい、翌月の受付日までに毎月約 60 件の受診希望の問い合わせが入り、地域からの依頼に十分には応えられなくなっている状況が続いている。

3. 年齢・性別および疾患名で分類した初診患者の推移

初診患者の年齢・性別による内訳を表 2 に記した。開院後 5 年間では、幼児から高校生までの子どもの受診が毎年の初診患者の約 8 割を占めていたが²⁾、最近 3 年間の総計では、初診患者の総計 643 人中、幼児から高校生までの子どもは 374 人で 58.2%を占めていた。2022 年度は同年代の子どもの割合は 51.3%、2023 年度は 65.1%、2024 年度は 66.2%であった。2022 年度は前述した特殊な事情が影響して、子どもの割合が約 30%も小さくなった。また 2023 年度～2024 年度については、大人の診療を専門とする医師が診療に加わったことにもあり約 15%減少となった。最近 3 年間で、18 歳から 29 歳までの初診患者は初診患者全般の 19.4%を占めており、開院以来 5 年間の同じ年代の割合（10.7%）よりも増加していた。

初診患者の疾患名による 3 年間の推移を表 3 にまとめた。初診時の病状としては、診断名は一つに限らないし疑いのレベルの場合もある。ただ統計的にまとめる必要がある関係で、受診者一人につき最も中心的な疾患一つに限って（疑いのレベルも含めて）まとめた。疾患の分類は DSM-5³⁾ によっている。

神経発達障害群の患者が非常に多く、特に注意欠如・

表 1 2022 年度から 2024 年度までの受診者数および初診患者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
2022年度 受診者数(延数)	354	363	360	403	420	399	418	391	457	357	374	442	4,738
内 初診患者数	86	60	28	28	28	17	16	17	15	12	12	16	335
家族相談件数	2	0	1	1	0	2	1	0	0	2	2	2	13
2023年度 受診者数(延数)	401	410	442	383	421	414	433	394	424	384	407	446	4,959
内 初診患者数	13	15	15	16	19	12	14	10	12	12	12	16	166
家族相談件数	1	3	1	0	2	3	2	0	1	0	2	1	16
2024年度 受診者数(延数)	458	425	404	440	448	411	453	399	440	416	383	430	5,107
内 初診患者数	15	13	10	13	16	9	15	11	13	13	7	7	142
家族相談件数	1	2	1	0	0	1	0	1	0	1	0	1	8

表 2 2022 年度から 2024 年度までの初診患者の年齢・性別による内訳

		2～6歳 (幼 児)	6～12歳 (小学生)	12～15歳 (中学生)	15～18歳 (高校生)	18～29歳	30～39歳	40～50歳	51～60歳	61歳～	全体
2022年度	男	21	43	19	24	30	7	9	4	3	160
	女	8	13	24	20	45	26	19	12	8	175
	計	29	56	43	44	75	33	28	16	11	335
2023年度	男	19	24	13	4	8	1	5	3	0	77
	女	2	28	14	4	18	6	11	4	2	89
	計	21	52	27	8	26	7	16	7	2	166
2024年度	男	23	30	7	9	9	4	2	2	0	86
	女	3	11	7	4	15	3	9	4	0	56
	計	26	41	14	13	24	7	11	6	0	142

表 3 2022 年度から 2024 年度までの初診患者の疾患名とその人数

疾患名	2022年度	2023年度	2024年度	計	%
神経発達障害群	168	95	85	348	54.1
(知的能力障害群)	(19)	(7)	(10)	(36)	(5.6)
(コミュニケーション症群)	(3)	(3)	(1)	(7)	(1.1)
(自閉スペクトラム症)	(73)	(51)	(32)	(156)	(24.3)
(注意欠如・多動症)	(69)	(31)	(35)	(135)	(21.0)
(限局性学習症)	(2)	(1)	(3)	(6)	(0.9)
(運動症群)	(2)	(2)	(4)	(8)	(1.2)
統合失調症スペクトラム障害群	10	2	0	12	1.9
双極性障害群	9	1	3	13	2.0
抑うつ障害群	67	30	14	111	17.3
不安障害群	27	17	12	56	8.7
強迫性障害および関連障害群	7	3	4	14	2.2
心的外傷およびストレス因関連障害群	11	4	14	29	4.5
解離性障害群	4	0	0	4	0.6
身体症状性および関連症群	11	4	2	17	2.6
食行動障害および摂食障害群	15	7	4	26	4.0
睡眠・覚醒障害群	2	0	3	5	0.8
パーソナリティ障害群	1	0	1	2	0.3
秩序破壊的・衝動制御・素行症群	0	2	0	2	0.3
物質関連障害および嗜癖性障害群	0	1	0	1	0.2
てんかん	1	0	0	1	0.2
その他(内科疾患など)	2	0	0	2	0.3
全体	335	166	142	643	100.0

※ %は 2022～2024 年度の初診患者総数（合計）に対する割合を示す

多動症と自閉スペクトラム症の両者で、この 3 年間でも初診患者の 45.3%を占めていた。次に多いのが抑うつ障害群で 17.3%，そして不安障害群が 8.7%であった。厚

生労働省の患者報告⁴⁾で令和 2 年度において精神疾患患者の 14.3%を示すと報告されている統合失調症スペクトラム障害群は当院ではわずかで、2024 年度のように一

人もいない年もあった。当院では初診予約をしてから実際の受診が3か月あまり先になるため、統合失調症のように急性期に変化が激しい疾患の治療に適していないという背景も推測される。

4. 心理検査について

2022年度から2024年度の直近3年間に実施された心理検査とそのフィードバックの件数を表4に記した。2017年度から2021年度にかけての5年間の心理検査・フィードバックの合計での全体件数は、それぞれ102, 215, 233, 212, 230件であったが²⁾、2022年度から2024年度の全体件数はそれぞれ、220, 280, 267件であった。2022年度までは勤務する公認心理師（臨床心理士）が1人であったのが2023年度からは2人に増えたため、実施する件数も増加させることができた。

心理検査の内容は、WISC（WISC-IV, WISC-V）知能検査が最も多く、次いで新版K式2020発達検査であった。他には年度による変化はあるが、WAIS-IV 知能検査, WPPSI-III 知能検査, PARS-TR（親面接式自閉スペクトラム症評定尺度）など、神経発達障害の診断や治療に関連する検査が多数を占めた。

当クリニックにおいては、心理検査は主に医師からのオーダーにより実施される。心理検査の検査目的は、受検する患者の特性を理解し、問題解決のための援助や治

療の方針を導き出すことであるが、同時に、鑑別診断の補助や治療経過の確認を兼ねるケースが大半である。他には、教育相談や公的書類の申請時での参考資料や情報に用いられるケースもある。フィードバックは、心理検査を実施した公認心理師（臨床心理士）が受検した患者やその保護者に対して、30分の時間枠を設けて行っている。心理検査について、受診者やその保護者からの希望も多く、現状では検査の実施まで4～5か月を要している。検査を少しでも迅速に実施する必要がある、今後の検査体制の充実が望まれる。

5. 2025年度からの動向と今後の課題について

2025年度から診療を担当する医師が3人になって、診療時間がこれまでの週20.5時間から26時間となった。診察日は週5日となり、火曜日の14:00～17:00及び水曜日の9:00～12:30も診療することとなった。診察依頼の電話に対して、予約枠が一杯ということで一度は断らざるを得なかったケースが、2024年度の場合730件、2025年度でも4月に45件、5月に61件、6月に77件あったという実情を考えると、当院は三重県の中勢・北勢地区における、児童・思春期精神科診療における一つの拠点クリニックとみなされてきているとも考えられる。2025年4月より神経発達障害の治療を専門とする医師が加わったことにより、これまで当クリニックがかかえていた課題が

表4 2022年度から2024年度までの心理検査とフィードバックの件数

検査内容	2022年度	2023年度	2024年度
WISC-IV, V	57	76	84
新版K式	19	23	23
WAIS-IV	13	13	11
PARS-TR	8	6	12
WPPSI-III	6	6	4
田中ビネー	1	5	2
K-ABC II	0	2	0
ロールシャッハテスト	4	1	2
SCT	0	5	1
その他	0	4	3
心理検査合計	108	141	142
フィードバック	112	139	125
全体	220	280	267

多少改善されることが期待できる。附属こころの相談センターとの連携について、これまで必要に応じて個別の症例について協議してきたが、今後例えば月 1 回の定期的会合をもつなど、さらに充実した連携が必要になる可能性がある。医療体制の更なる充実が必要になるだろう。

謝 辞

鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニックの運営などに関しては、本学の高木純一理事長、豊田長康学長、矢田智樹人事・厚生課長、藤原芳朗医療福祉学科長、大橋明医療福祉学科臨床心理学専攻長をはじめ、多くの方々のご助力、ご協力をいただきました。心より深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 大谷正人：こころのクリニック開院後 2 年間の受診状況と今後の課題. 鈴鹿医療科学大学紀要 2019; 26: 133-139.
- 2) 大谷正人, 平山木綿子, 吉井恭子：こころのクリニック開院後 5 年間の受診状況と今後の課題. 鈴鹿医療科学大学紀要 2022; 29: 89-95.
- 3) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition. DSM-5. American Psychiatric Publishing, Washington D.C., 2013 (日本精神神経学会日本語版用語監修, 高橋三郎・大野裕監訳, 染谷俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉訳: DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, 東京, 2014)
- 4) 小田清一, 石丸文至, 加古敦也, 佐々木佳名子, 中山美恵, 山崎勇貴, 他: 精神障害者の状況. 国民衛生の動向・厚生指標 増刊・第 71 巻第 9 号. 一般財団法人 厚生労働統計協会, 2024; 112.

 — プロフィール —

大谷 正人 鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉学科・教授 博士（医学）

〔経歴〕1981年三重大学医学部卒業，1986年三重大学医学部附属病院助手，1999年三重大学教育学部教授，2016年鈴鹿医療科学大学保健衛生学部特任教授，2017年鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック院長。〔専門〕摂食障害や発達障害などの児童青年精神医学，音楽家の病跡学。

平山 木綿子 鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック，学生相談室・カウンセラー（臨床心理士，公認心理師） 修士（臨床心理学）

〔経歴〕1994年高知大学人文学部文学科心理学専修卒業，2013年京都光華女子大学大学院人間関係学研究科心理学専攻臨床心理学コース修士課程修了，2018年鈴鹿医療科学大学学生相談室勤務，2019年鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック勤務，〔専門〕臨床心理学。

半野 杏果 鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック，学生相談室・カウンセラー（公認心理師） 修士（臨床心理学）

〔経歴〕2019年鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉

学科臨床心理学専攻卒業，2022年鈴鹿医療科学大学医療科学研究科医療科学専攻修了，2022年鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック・こころの相談センター勤務，2023年鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック・学生相談室勤務。〔専門〕臨床心理学。

近藤 年隆 鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉学科・准教授 学士（医学）

〔経歴〕2009年獨協医科大学医学部医学科卒業，2013年獨協医科大学精神神経医学講座学内助教，2015年栃木県立岡本台病院医師，2019年樟純会武内病院医師，2022年鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉学科准教授，鈴鹿医療科学大学附属桜の森病院医師。〔専門〕気分障害，不安障害など。

水谷 史生 鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック 学士（経済学）

〔経歴〕1977年富山大学経済学部卒業，1977年株式会社三重銀行（現株式会社三十三銀行）勤務，2013年学校法人鈴鹿医療科学大学勤務，2023年鈴鹿医療科学大学附属こころのクリニック勤務。

Medical situations in the Center for Psychiatry and problems with the Center during three recent years

Masato OTANI^{1, 2)}, Yuko HIRAYAMA²⁾, Kyoka HANNO²⁾,
Toshitaka KONDO^{1, 2)}, Fumio MIZUTANI²⁾

1) Department of Medical Welfare, Faculty of Health Science, Suzuka University of Medical Science

2) Center for Psychiatry, Suzuka University of Medical Science

Key words: university-attached clinic, child and adolescent psychiatry, DSM-5, neurodevelopmental disorders

Abstract

The medical situations in the Center for Psychiatry and the problems with the Center during 3 recent years were reported. Children and adolescents from 18 years old and under accounted for 58.2 percent among 643 patients who had first medical examinations in this center during 3 recent years. In relation to their diagnoses, both of attention-deficit/hyperactivity disorder and autism spectrum disorder amounted to about half (45.2 percent of 643 patients). Hence more doctors and clinical psychologists who examine children and adolescents will be needed in this Center.